



講演 越智貢（おちみつぐ）

mochi@ipc.hiroshima-u.ac.jp

「情報倫理の構築」プロジェクト(FINE) FINE広島

年齢:47歳

所属:広島大学文学部

役職等:教授

勤務年数:約15年

専門分野:応用哲学、応用倫理学

現在の関心事:「情報倫理の構築」プロジェクト(学術振興会)

「を学校の児童・生徒 全員に与えるべき」 条件付きYes

演題「情報倫理と教育」

私の話の要点は単純である。次の三点で言い尽くせる。

1. 電子ネットワークの世界でモラルを確立しようとするれば、「よい人」を育てること以外にはないこと。
2. その意味でも、ネットワーク世界と日常世界とは連動していること。
3. それゆえ、いわゆる「情報モラル」の教育だけで事足りりとすることはできないこと。

日頃付き合いのある先生方の多くは、情報教育に不安を感じていると話す。不安はおおよそ二つに大別できる。一つは、時間に関する不安。そして、いま一つは、子供たちが引き起こすであろうトラブルへの不安。

情報機器の操作に不慣れな先生は、新しい知識や技能を身につけるための時間と労力を考えてため息をつき、逆に熟練者の先生は、それまでボランティアとして行ってきた機器管理が職務となることでいっそう自由な時間を奪われるだろうことを考えてため息をつく。

しかも、いくらフィルタリングを施しても、日常頻発するトラブルに輪をかけたトラブルが生ずることが予感され、これに対処するためには、さらに多くの時間と労力が奪い取られることが予想される。現状でも子供たちと十分なコミュニケーションをしようほどの「ゆとり」を見出せないのに、情報教育

が始まれば、さらにゆとりのない生活になってしまう。このように心配する先生にとって、情報教育の導入は面倒をもたらすやっかいものでしかない。

かくして、次のような意見をもつにいたる先生も少なくない。「私自身は学校教育現場にコンピュータは導入すべきでないと思う。いま言われているのは『心の教育』である。血の通った人間同士のふれあい、関わり合いを大切にされた教育が見直されているし、私もそう思う。不便でも、合理的でなくても、とくに小学校には、そのことをしっかり体験させておくべきだと思う。」(「情報倫理の構築」プロジェクト・アンケート結果)

この先生の意見とは異なり、私自身は是非とも情報教育が必要だと思っている。子供たちが引き起こすはずのトラブルにもそれほどの心配はしていない。かえって、トラブル・メーカーとして生きている子供が、一切のトラブルから隔離されてしまえば、人生の知恵を学習する重要な機会が奪われてしまうとすら考えている。

ただし、上記の先生の言葉には、私の意見に近い考えも含まれている。それを表現しようとしたのが、上記の三命題である。すなわち、電子ネットワークの世界のモラルは、情報モラル教育(だけ)によって実現できるものではない。情報モラルは「よい人」の育成を可能にするモラルではなく、いわば「よい人」を前提にしたモラルだからである。